

## 朝露に映った夢

露草の染みるような青が

朝の緊張を伝えて

露の宝石を惜しげもなく振り落とす

透明な空気を一気に取り入れようと

視線が遠景へとスウィングする

岡の上

ポプラの林の影からうねって続く

細い径が

リズムカルに

僕の視野へ幅を拡げて入り込んで来る

その径をあらためてなぞるように

子犬に急かされた少女の

陽炎う輪郭がよろめきながら走って来る

少女の小さな口が動く

声は聞こえるが

聞き取れはしない

やがて犬の黒い眼が見え

尾が振り子のように揺れ

喘ぎが聞こえ始める

「ダメ。急がないで。」少女が懇願する

低い優しい吠え声を出して

犬はスキップしながら少女の回りを

くるくる舞い走る

少女は悲鳴を上げるが

その声は弾んでいて

今にも倒れそうなほどの恍惚感

少女は少し足が悪い

朝の幸せなロンドの香りが

毎日僕とすれちがい

疲れた僕を置いてきぼりにし

今歩いて来た道の方へと

舞い去って行く

露草色をした

透明な朝の香水